
俺とこいつ。

熱帯夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とこいつ。

【Nコード】

N 6 6 7 7 K

【作者名】

熱帯夜

【あらすじ】

ひよんな事から付き合う事になった俺とあいつ。はつきり言
って俺は奴が好きなのはよく分らない。
いつの間にか流されているような気がするが…？
まあこれから何とかなるよう努力するさ。

ブローグ

「先輩は姉さんに頼まれたからこんな俺の世話見てくれてるんですよ。先輩の… 意思じゃないんですよ」

初めはな。だが満更でもない。お前と居るのは嫌じゃないよ。そりゃ時々戸惑ったり怒ったりするけど、人として当然だし今となっっちゃあそれもお前の個性なんだろ、そう受け止めてる。

「別に俺の事見捨てても良いんですよ？　そういうのには慣れっこだし」

はっ、今さら何言ってるんだ。

人聞きの悪い… 見捨てたりなんかしねーよ。

あと、慣れっことか言うな。友達くらい自分で作れ。

「… 努力はします。それに、さっきはあんな事言っただけ、やっぱり俺は先輩と一緒にいたいんです。」

言ってる事が無茶苦茶だな。

俺の話聞いているのか。いつも言ってるだろ？

大事なのは言葉のキャッチボール。

「すいません。こんなんだから友達も居ないんでしょうね。でも俺は先輩が居れば何でも良いし。先輩以外、別にどうでもいい」

俺が困る。俺が居なくなったらどうする気だ。

お前のお姉さんにどーやって顔会わせろって言っただよ。

「… 先輩は、姉さんの事が好きなんですか？」

まさか。

あの人は独裁者だ。

「……………。そうですね」

そう言ってお前は自分の唇に俺の唇を重ねる。

抵抗しても無駄だと知っているから俺はすんなりそれを受け入れる。

まったく、タイミングとか全然分かんねーよ。

頼むから、これ以上俺を乱さないでくれ。

1話

「好きです！　付き合ってください！」

たった今告白したのは俺、響宏一。ちなみに高校三年生だ。

「御免なさいっ！」

そしてたった今俺の告白を断ったのが名は言わないが俺が好意を寄せている女の子。

つか今俺フラれた？

「え！？　あ、そうですか」

おかしいな。確かに脈あったような気がしたんだけどな。予想外の事が起つて凄いい臓がバクバクしてるんですけど。

「すいません。お気持ちは嬉しいんですけど…」

まあ好意を寄せられて嬉しくないっていうのもどうかと思うがな。

多分俺、どうも言えない顔してんだろっな。

「えっと、私…他に好きな人がいて…」

そっか。只の俺の勘違いだったのか。

1人で舞い上がって、馬鹿みてえ。

だってこの子が俺を見る目――

「あ……」

そうそうこの俯き加減の何とも言えないって…え？

「先輩ー。昼一緒にたべましょー」

彼女の視線の先には――

後輩、飛屋恭哉が俺を昼に誘いに来たところだった。

2話

確かにあいつは男の俺から見てもかなり格好いい。

綺麗に顔の形も整っていて少し切れ目加減の目と視線が合うと微妙に鼓動が早くなる気がする。

無論、誰もがだ。俺だけに限らない。

あいつの存在はそれだけに人を惑わす力がある。

だからって、自分に自信があるからって…

「響先輩、私が好きなのは…」

そう言つてちらりと恭哉の方に視線を移す。

ああ、俺が勘違いしてた視線はこいつに向けられてたのか。

確かによくこいつとは一緒にいるからな。

今だって一緒に昼食食べる為にわざわざ探しに来てくれたんだもんな。なるほどな。しっかり理解出来ました。

そんなしらけた俺の顔に目もくれず、彼女は恭哉に話しかけている。

「あの…私、飛屋君の事が前から好きでした」

うん、知ってる。だからわざわざ口に出さなくてもって…え。

この乗りで告白するものなの？

たった今告白されたばっかなのに？

つか告白した俺の前でやるもんなの？

多分俺今目が半分飛出てる気がする。

だが肝心の恭哉の返事は、

「え、ごめんなさい」

あっさりと断りやがった。

俺の立場は何だってんだ。

やべ、流石に涙が…前が滲んで見えないぜ。

明日も見えない。

そんな俺を露知らず、彼女達は何度か言葉を交わして、最終的に彼女が俺の様に涙を浮かべ走って行ってしまった。

俺と恭哉は暫くそれを見つめていたが恐る恐る、

「あの…恭哉君？　もしかして気を使っちゃった？　今の子可愛かったよ？」

俺が言うのも何だけど彼女を弁解する。

何でこんな事になったんだか…。

「だってあの子？　…趣味悪い」

俺の趣味がそんなに悪いと。ははっ。

この瞬間俺はキレた。おおキレましたとも。

「一円を笑う奴は一円に泣くんだからなあ！！」

そんなよく分からない事を叫びながら俺はこいつをひっぱたいた後逃げる様に走り去ったんだ。

3話

「それで、飛屋だけ置いて来ちゃったの？」

「うるせーしよがなかったんだ」

あの後俺は教室に戻って先程の事を赤裸々に語り尽くしました。穴があつたら埋もれたい。

「だってあの子絶対俺見て頼染めてたんだもん」

「そりゃ飛屋関係なら上履にだって頼染めるわ」

くそ、言い返せねえ。

「それで置いてかれた飛屋はどうしてるだろーね？」

「多分あそこで独り飯食ってる」

「はあ？ そりゃないだらいくら口下手だからって、1人も友達
がいないなんて」

「馬鹿野郎！ あいつの場合は極め付きなんだ！ 今頃さつき

の所で独り飯食ってるに決まってる」

うう、自分で言っちゃ何だがなんか心配になってきた。

よし、あいつの所へ戻ろう！

そう決め、勢いよく席から立ち上がる。

「お、やっぱり気になっちゃう感じ？」

「行ってこい行ってこい」

馬鹿2人がはやし立てる。

うるせー黙れ。

「5限に間に合うように来いよー」

「分かってるって」
でもまあ…やっぱり持つべきものは友達だな。

4話

ほら居た。言わんこつちやない。

何でそんなに平気で独りで食べられる？

俺だったら泣いてるね。

この…強い子め！

そう俺が思っている内に近付いて来る俺に気付いたみたいだ。

ゆつくりと俺と視線を合わせる。

ぎゃああああああああああああ！！

イケメンの顔に叩かれた跡が！

誰がやったすいません俺です。

そんな俺に構わず恭哉は口を開く。

「わぁ…ビックリした」

絶対してねーだろ。

そう心でツツコミを入れながら隣に座る。

やっぱ近くで見ると一層色男の顔に跡がついているのが目立つ。

「言つとくけどな、俺は悪いことしたかもしれないけど謝らないかな！ お前だって悪いんだからな！」

「別に…気にしてません」

そう言われると更に罪悪感が…。

何か矛盾してる様な気もするがお互い様なんだ。

だがもう一度ちらりと横目でこいつの横顔を見る。

ああ…手の跡がくつきり…。

「やっぱ痛かったよなー御免なー」

「…。」

あれ、今声に出てた？

「…先輩お昼は？」

「あーさつき教室でかつ込んだ」

「そうですか」

「……… 気まずい。」

何を話せば良い？

あまり会話が無いのはいつもの事だが流石にキツイぞこれは。

そんな事を必死で考えている傍らでこいつは残りの昼飯をもくもくと食べている。

ちきしょー何しても似合う顔だなー！。

そんな顔に俺は――

っだあもうっつー！！

「恭哉、俺を殴れ！」

「え？」

「良いから俺を殴れ！　　取り敢えずこれでおあいこだ！　　ほら

！」

だああああ何やってんだ俺は！？

気持ち悪っ！？

こんな先輩居たら絶対ドン引きするって！

漫画の読み過ぎだ俺。

そう心で叫びながらも、恭哉に殴る様促していく。

「でも……」

そりゃ戸惑うわな。

俺だっっていきなり殴ってくれなんて言われたらどうすれば良いか分かったもんじゃねーもん。

じっと見つめて来る恭哉。

それはもうじつと――。

じつと――。

じいーつと——。

見過ぎじゃね？

よくよく顔を見てみると、何故だが頬が火照っている様に赤い。俺がやったのとはまた別の赤さだ、御免なさい。

それにしてもこの目どつかで——。

ふっ、と俺が先程まで好きだった女の子の顔が重なった。

…そうだ！ あの目だ！

俺を通じて恭哉を見てたあの目と同じなんだ。

つつう事はなんだ。

こいつは何を見て…自分だ。

あいつ俺の目に映っている自分に頼染めてやがる。

なんて奴なんだ。まさに魔性の男。自らをも虜にするとは恐ろしい子。

そう思いながら俺は両目をぎゅっと閉じる。

だがそうはいかない。お前の目論み通りになってたまるか。

しばし俺の視界は閉ざされる。これで恭哉も魔性の自分に虜にされずに済む。

さあ本題を忘れるな。俺を殴る——。

確かに今こいつは俺に触れた。

だが殴る訳でもはたく事でも無く、違う方法で。違う意味を込めて俺の唇に触れた。

——どうやって？

「先輩…俺をあんまり困らせないで」

ぱちりと目を開けた俺にそいつはこう言った。

5話

恭哉？　　確か先輩の弟君っすよね。

「そうそう。家遊びに来た時何度か会ったでしょ？」

あんま似てないっすよね。

「思っても言うな。それで今度ウチと入れ替わりに入学して来るから。面倒みてやってくれ。知っての通り、中身がアレなんでね」

自分の弟でしょ？　　そゆこと言うもんじゃありませんよ。…まあ否定は出来ませんが。

「お前もなかなか正直になったな」

先輩の影響ですよ。

「ははっ。そうかもしれないな。じゃ、色々と恭哉の事頼んだぞ」

出来る限りは頑張ります。でも弟君ももっとフレンドリーになるべきですよ。

「分かってるって。お前も色々と覚悟しとけよ」

覚悟？

「その内わかるって」

——そう言ってあいつと同じ顔で微笑んでいた

…こういう時だけ顔がそっくりとか、なんか癪だ。

5 話（後書き）

…まさに亀更新。

もしかして読んでる方すいませんっ!!

言い訳をすれば余計見苦しくなるのであれですが……

寛大な心で見守って頂けると幸いです

6話（前書き）

前回言い忘れましたが、お気に入り登録してくれた方有り難う御座います！！

これを糧に頑張っていきたいと思えます！！

6 話

その意味が今になってやっと分かりましたよ。

俺は今人生最大の混乱期を迎えている。

「恭哉…実は俺、男なんだ」

「知ってます」

「胸もAカップもないんだ」

「当然です」

「ハンコ注射の跡が消えないんだ!」

「…立てます?」

そりゃ誰だって戸惑うだろ!?

告白されりゃ、しかも男に!

そしてその男がかなりの色男ときたもんだ。困るね。

飛屋恭哉という男が分からない。
顔の良い…

「…ホモ?」

「はあ??」

場所は一転。

昼休みが終わって今は教室に居る。

ぶっちゃけ逃げた。

誰だってあんな状況に陥れば逃げるだろう。それが普通だ。

俺は次の授業で使う教科書を用意しないまま机に突っ伏していた。ついでに心の声が漏れたらしい。

「で、ホモが何だって？」

「何々なんの話ー？」

こいつらは俺のクラスメイト。

ちなみに昼一緒にいたのもこいつらだ。

お互いに色んな相談もする仲だ。
だが――

「何でもねえよ」

男に初チュー奪われたなんて言えるもんじゃない。

ましてやあの恭哉だ。

何を言われるか分かったもんじゃない。

「何だなんだー。誰から告白でもされたかー？」

「…っ馬鹿！！　　んなんじゃねーし！！」

洒落になんねえんだよおおいいいい！！

「まあまあ。その辺にしてあげなよ。…でも本当に何かあったの？」

「顔色悪いよ?」

「まじ?」

「おーよ。んで俺達に言えない事なのか?」

「別に無理して言わなくていいんだよ?

ただ心配で…」

——持つべきものは友達だよな…?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6677k/>

俺とこいつ。

2010年10月9日11時26分発行